



ピッポ新聞

2007
12
No.226

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail itoh@pippo.co.jp

さあー、クリスマス・
お正月がやってくる！

子どもたちにとって最大の楽しい季節がやってきます。「クリスマス」と「お正月」ですね。もっとも近頃ではTVや町の中は一年中クリスマスやお正月状態です。子どもを取り巻く環境は一年中お祭り状態なのです。こんなことは、子どもたちにはけっして良いことではないと思います。

子ども時代は、落ち着いて規則的な繰り返しの中で、メリハリの利いた生活こそ必要なことではないでしょうか。毎日がお祭りであり続けたら、あるいは物質的に満たされ続けたら、だれだっておかしくなってしまう。

人はそれぞれの人生で、ときどき喜怒哀楽を感じて成長することが大切なのではないでしょうか。わたしたち大人は、知らず知らずのうちに、その機会を子どもたちから奪ってしまっているのかもしれない。

子どもにはハレのときがたまに、あるいは一年に一回だからこそ、喜びも楽しみも大きのだと思います。

一年に一回だからこそ、大人は子どもたちのためにハレの舞台を大事にしてやりたいものです。今月はそんなときのお役立ちのアイテムを本を中心に紹介します。

クリスマスと冬の絵本



『ふゆがすき』(ロイス・レンスキー・さくまゆみこ・訳 683円 あすなろ書房) 「スモールさん」のちいさな絵本シリーズで人気のレンスキーですが、彼のクリスマス絵本。リズムカルな訳文によって、子どもたちの冬の遊びの様子や、クリスマスの準備を愉しく描いています。

『14ひきのもちつき』(いわむらかずお・作 1260円 童心社)



14ひきシリーズの最新刊。みんなおもちをついたことあるかな？ちよつと前までは多くの家(特に田舎では)家族や親戚があつまって、お正月のもちつきをやったも

のなんだ。それはそれは、子どもには楽しいものだった。この絵本中の14ひきの家族のように一家総出で準備した。黄粉やあんこでくるんだ突き立てのおもちの、なんとつまかったことか！

『クリスマスプレゼント』(あいはらひろゆき・文 あだちみな・絵 各1050円 教育画劇)



この絵本は「1はな」と「2ほし」の2冊からなっています。それぞれのお話ですが、2冊あわせて読むとうなずける話になっていきます。2冊が一つの化粧ケースにはいっています。

います。女の子は一人でお母さんを待っています。サンタが女の子にプレゼントの希望を聞きます。女の子は「わたしはなににもいらないは おかあさんといっしょにいられたら それでいいの」。サンタは空の散歩に女の子を誘います。そこで女の子がみたものは……。2のほしのお話 イブの夜、女の子が寒い外でケーキを売っています。ようやく最後の一個が売れました。女の子は急いで帰り支度をしてバス停へ急

ぎました。けれども終バスは出てしまったところでした。ベンチで途方に暮れていると、サンタがあらわれました。そして……。この2冊、1は緑色2は赤のクリスマスカラーのカバーでおおわられていておしゃべりです。

『聖なる夜』(セルマ・ラーゲルレーヴ・文 イロン・ヴィークランド・絵 うらたあつこ・訳 1974円 ラトルズ)

このお話の作者セルマ・ラーゲルレーヴは、『ニルスのふしぎな旅』の作者です。彼女はおばあさんからたくさんのお話を聞いて育ったそうですが、その中の一つが、このクリスマスのお話です。生まれたばかりの子どもと妻のために暖をとるための火を求めた男が意地悪な羊飼いのもとまできました。ところそこで不思議なことがおこります。不思議におもった羊飼いがついて



いくと岩山の洞窟で寒そうにした赤ちゃんとお母さんが。思わず羊飼いは羊の皮を取り出して赤ちゃんへ、すると今まで見えなかったたくさんの天使たちが回りで……。この絵を描いたイロン・ヴィークランド

はリンドグレーンの物語の挿し絵画家として有名。ここでもお話にぴったりの絵で雰囲気をつくり伝えてくれます。

『クリスマス』(バーバラ・クーニー・作 安藤紀子・訳 1575円 長崎出版) クリスマスはにぎやかで楽しいものです。



ね。でもクリスマスは最初から今のような姿ではなかったのです。この絵本ではそんなクリスマス

の歴史や、さまざまな地域や国ではクリスマスがどんな風に行われているのかを解りやすくかつ簡単に紹介しています。ご存知のように、クリスマスはキリストの誕生日として祝われるものです。でもそれだけでなく、それ以前の宗教や人びとの暮らしや行事の影響を受けながら、現在にまで至っているようです。

プレゼントにロバート・サブダの仕掛け絵本を！

クリスマスのプレゼント用に、「紙の魔術師」と呼ばれる、ロバート・サブダのポップアップ絵本を集めました。サブダはアメリカ生まれの絵本作家で、

小さい頃から工作が得意だったそうです。今や、彼の作品は子どもだけでなく大人にも人気があります。ここに特集したのは大日本絵画から出版されているものです。

『ナイト・ビフォー・クリスマス』



(きたむらまさお・訳 3360円)

サンタクロースの原型になったといわれたクレメント・ムーアの有名な詩に、サブダも仕掛け絵本ならではの世界を展開。

『クリスマスの12日』



(上野和子・訳 3360円)

これもまた「クリスマスの12日」というわらべうたにサブダがユーモア溢れる独自世界を表現した絵本。

『クッキーカウント』

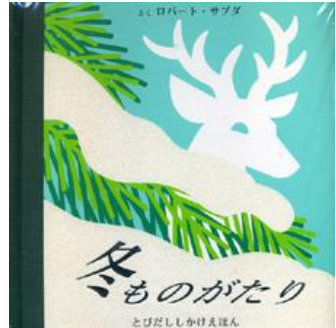


(わくはじめ・訳 2940円)

数え歌にのって、サブダが腕を振るったおいしいクッキーとネズ

ミがつぎつぎに飛び出してくる。

『冬ものがたり』



(わくはじめ・訳 3990円)

サブダのオリジナル作品。動物たちの冬ものがたり。白の色彩を見事に引き出した森の雪景色はとても美しい。

『クリスマス・アルファベット』



(きたむらまさお・訳 2940円)

A～Zカード形式のめぐりがついているしかけ絵本。白い紙で作った構造物が、すばらしいできばえで、欧米では100万部も売れたベストセラー絵本。

ねー、この本読んだ

『初雪のふる日』

(安房直子・作 こみねゆら・絵 1470円 偕成社)

村の一本道の上にもうせきで描かれた石けりの輪。それはどこまでも続いています。

女の子は輪の中にぴよんと飛びこみました。するとリズムカルにどんどん進んでいきます。随分遠くまで来てしまいました。雪もちらついてきました。気付くと、前後に白いウサギが一緒に一列



になってはねていました。女の子はおばあさんの言ったことを思い出したのです……。

この絵本は『童話集 遠い野ばらの村』のなかの「初雪のふる日」を底本にしたもの。

『ジャンプリーズ』



(エドワード・リア・文 エドワード・ゴリー・絵 柴田元幸・訳 1050円 河出書房新社)

イギリスのヴィクトリア時代のナンセンス詩人であり画家であるエドワード・リア(1812～1888年)の5行詩(リメリック)に、アメリカのエドワード・ゴリーが線画で描いたナンセンス絵本。

リアは多くの画家なごに影響を与えたが、佐々木マキも『たわごと詩たち』(福音館書店刊 品切れ)な

を出している。

リアの『ナンセンスの絵本』はとても有名ですが、その2冊目『ナンセンスの歌・物語・植物学・アルファベット』という古書がピッポにあります。これは1871年にロンドンで発行されたものですが、リアのナンセンスなイラストがふんだんに載っています。その初版本です。販売価格は三十万円です。興味のある方はピッポのホームページをご覧ください。

『きつねのフォスとうさぎのハース』
 (シルヴィア・ヴァンデン・ヘッド・作
 テー・チョンキ・絵 野坂悦子・訳 1995円 岩波書店)



のハースが森でいつしよに暮らしています。お隣のフクロウともども、登場人物たちの行動はなにやらわた

したち人間の暮らしそのものという感じですが。喧嘩しながらも相手をおもいやる気持ちにじんんでいます。

登場人物のしぐさや背景などの絵はお話にぴったりで、ヨーロッパの子どもたちに大人気というのうなずけます。絵物語。

かるた・すごろく・ゲーム

かるた

ぐりとぐらかるた	福音館書店	1050円
ばばあちゃん	福音館書店	1050円
日本の昔話かるた	福音館書店	1260円
せなけいこ・おばけかるた	童心社	1260円
へんてこかるた	小学館	998円
ピーマン村かるた	童心社	1365円
だじゃれゆうえんち	民衆社	1050円
きりえかるた	江戸いろは 新泉社	1050円
きりえかるた	上方いろは 新泉社	1575円
せかいしゅう	かるた 世界文化社	1000円
ことわざあいうえおかるた	世界文化社	900円
101漢字カルタ	太郎次郎社	2987円
幼稚園 かんじカルタ	太郎次郎社	2100円
98 部首カルタ	太郎次郎社	2987円
11 ぴきのねこかるた	こぐま社	1260円

すごろく

かわいむしのすごろく	童心社	1050円
おばけすごろく	童心社	1050円
ピーマン村すごろく	童心社	1050円
ばばあちゃんのおぼけんすごろく		525円
ねぎぼうずのあさたろう	東海道五十三次	525円

ゲーム

ハリガリ(日本語)	AMIGO	2730円
へびゲーム	AMIGO	1470円
ロバの荷物積みゲーム	AMIGO	2730円

カレンダー

のはらうた	アトリエみやま	1785円
ぐりとぐらカレンダー	福音館書店	1200円
カレンダー 林明子の世界	福音館書店	1400円
森へようこそ	村上康成	1575円

ほかいろいろあります。

編集後記

先日、姪の結婚式が静岡駅前ホテルでおこなわれた。披露宴はホテルの15階が会場だった。暮れゆく静岡の街を眼下に見下ろしながら、親戚の人たちと立ち話をしていた。遠く竜爪山が晩秋の夕日を受けて立っている。文殊岳の後に重なるように薬師岳が見える。この角度から見ると竜爪ははじめてだが美しい。しかし、その竜爪へなめらかにせり上がっていく美しい景色を、無粋に分断しているものがある。現在県下いたるところで工事がすすめられている第二東名である。親戚の人もこの異様な景色が気になっただけでなく、こんな事を言った「第二東名は単なるバイパスで終わるかもしれない」と。なぜなら、西隣の愛知や神奈川では、工事はおろか土地の買収さえ進んでいないからだという。そうであるなら、いっただれがこの責任をとるのだ!